

壊滅の序曲

原民喜

青空文庫

朝から粉雪が降っていた。その街に泊った旅人は何となしに粉雪の風情に誘われて、川の方へ歩いて行ってみた。本川橋は宿からすぐ近くにあった。本川橋という名も彼は久し振りに思い出したのである。むかし彼が中学生だった頃の記憶がまだそこに残っていた。そうだった、粉雪は彼の繊細な視覚を更に鋭くしていた。橋の中ほどに佇^{たたず}んで、岸を見ていると、ふと、「本川 饅^{まんじゅう}頭」という古びた看板があるのを見つけた。突然、彼は不思議なほど静かな昔の風景のなかに浸っているような錯覚を覚えた。が、つづいて、ぶるぶると戦^{せんりつ}慄^わが湧^わくのをどうすることもできなかった。この粉雪につつまれた一瞬の静けさのなかに、最も痛ましい終末

の日の姿が閃いたのである。……彼はそのことを手紙に誌して、その街に棲すんでいる友人に送った。そうして、その街を立去り、遠方へ旅立った。

……その手紙を受取った男は、二階でぼんやり窓の外を眺めていた。すぐ眼の前に隣家の小さな土蔵が見え、屋根近くその白壁のところが剥はく脱だつしていて粗あらい赭あかつち土を露出させた寂しい眺めが、——そういう些ささい細な部分だけが、昔ながらの面影を湛たたえているようであつた。……彼も近頃この街へ棲むようになったのだが、久しいあいだ郷里を離れていた男には、すべてが今は縁なき衆しゅじ生ようのようであつた。少年の日の彼の夢を育はぐんだ山や河はどう

なつたのだろうか、——彼は足の赴く^{おもむ}ままに郷里の景色を見て歩いた。残雪をいただいた中国山脈や、その下を流れる川は、ぎこちなく武装した、ざわつく街のために稀薄^{きはく}な印象をとどめていた。巷^{ちまた}では、行逢^{ゆきあ}う人から、木で鼻を括^{くく}るような扱いを受けた殺氣立つた中に、何ともいえぬ間の抜けたものも感じられる、奇怪な世界であつた。

……いつのまにか彼は友人の手紙にある戦慄について考えめぐらしていた。想像を絶した地獄変、しかも、それは一瞬にして捲^まき起るようにおもえた。そうすると、彼はやがてこの街とともに滅び失^うせてしまうのだろうか、それとも、この生れ故郷の末期の姿を見とどけるために彼は立戻つて来たのであろうか。賭^{かけ}にも等

しい運命であつた。どうかすると、その街が何ごともなく無疵むきずのまま残されること、——そんな虫のいい、愚かしいことも、やはり考え浮ぶのではあつた。

黒羅紗くろらしゃの立派なジャンパーを腰のところで締め、綺麗きれいに剃かみそ刀りのあたった頤あごを光らせながら、清二は忙しげに正三の部屋の入口に立ちはだかつた。

「おい、何とかせよ」

そういう語氣にくらべて、清二の眼の色は弱かつた。彼は正三が手紙を書きかけている机かたわらの傍そばに坐り込むと、側にあつたヴィンケルマンの『希臘ギリシヤ芸術模倣論もほうろん』の挿絵さしえをパラパラとめくつた。

正三はペンを擱くと、黙って兄の仕事を眺めていた。若いとき一時、美術史に熱中したことのあるこの兄は、今でもそういうものには惹きつけられるのであろうか……。だが、清二はすぐにパタンとその本を閉じてしまった。

それはさきほどの「何とかせよ」という語氣のつづきのようにも正三にはおもえた。長兄のところへ舞戻って来てからもう一カ月以上になるのに、彼は何の職に就くでもなし、ただ朝寝と夜更しをつづけていた。

彼にくらべると、この次兄は毎日を規律と緊張のうちに送っているのであった。製作所が退けてからも遅くまで、事務所の方に灯がついていることがある。そこの露次を通りかかった正三が事

務室の方へ立寄ってみると、清二はひとり机に凭^よつて、せつせと書きものをしていた。工員に渡す月給袋の捺^な印^{いん}とか、動員署へ提出する書類とか、そういう事務的な仕事に満足していることは、彼が書く特徴ある筆^{ひつ}蹟^{せき}にも窺^うわ^かれた。判で押したような型に嵌^はま^まった綺麗な文字で、いろんな掲示が事務室の壁に張りつけてある。……正三がぼんやりその文字に見とれていると、清二はくると廻転椅子を消えのこった煉炭ストーブの方へ向けながら、「タバコやろうか」と、机の抽^ひ匣^{きだし}から古びた鵬^{ほう}翼^{よく}の袋を取り出し、それから棚^{たな}の上のラジオにスイッチを入れるのだった。ラジオは硫^い黄^{おう}島の急を告げていた。話はとかく戦争の見とおしになるのであった。清二はぽつんと懷疑的なことを口にしたし、正三ははっ

きり絶望的な言葉を吐いた。……夜間、警報が出ると、清二は大概、事務所へ駈^かけつけて来た。警報が出てから五分もたたない頃、表の呼鈴が烈^{はげ}しく鳴る。寝^ね呆^ぼけ顔^{がお}の正三が露次の方から、内側の扉を開けると、表には若い女が二人佇んでいる。監視当番の女工員であつた。「今晚は」と一人が正三の方へ声をかける。正三は直^じかに胸を衝^つかれ、襟^{えり}を正さねばならぬ氣持がするのであつた。それから彼が事務室の闇^{やみ}を手探りながら、ラジオに灯りを入れた頃、厚い防空頭巾^{ぼうくうずきん}を被^{かぶ}つた清二がそわそわやって来る。「誰かいるのか」と清二は灯の方へ声をかけ、椅子に腰を下ろすのだが、すぐにまた立上つて工場の方を見て廻つた。そうして、警報が出た翌朝も、清二は早くから自転車で出勤した。奥の二階でひとり

朝寝をしている正三のところへ、「いつまで寝ているのだ」と警告しに来るのも彼であつた。

今も正三はこの兄の忙しげな容子にいつもの警告を感じるのであつたが、清二は『希臘芸術模倣論』を元の位置に置くと、ふと
 こう訊ねた。

「兄貴はどこへ行つた」

「けさ電話かかつて、高須の方へ出掛けたらしい」

すると、清二は微かに眼に笑みを浮べながら、ごろりと横になり、「またか、困つたなあ」と軽く呟くのであつた。それは正三の口から順一の行動について、もつといろんなことを喋りだすのを待っているようであつた。だが、正三には長兄と嫂とのこの頃

の経緯いきさつは、どうもはつきり筋道が立たなかつたし、それに、順一はこのことについては必要以外のことは決して喋らないのであった。

正三が本家へ戻つて来たその日から、彼はそこの家に漾ただよう空氣の異状さに感づいた。それは電燈に被せた黒い布や、いたるところに張りめぐらした暗幕のせいではなく、また、妻を喪うしなつて仕方なくこの不自由な時節に舞戻つて来た弟を歓迎しない素振ばかりでもなく、もつと、何かやりきれないものが、その家には潜んでいた。順一の顔には時々、嶮けわしい陰翳いんえいが挾えぐられていたし、嫂めかけの高子の顔は思いあまつて茫ぼうと疼うずくようなものが感じられた。三みつ三び

菱へ学徒動員で通勤している二人の中学生の甥も、妙に黙り込んで陰鬱いんうつな顔つきであつた。

……ある日、嫂の高子がその家から姿を晦くらました。すると順一のひとり忙しげな外出が始り、家の切廻しは、近所に棲すんでいる寡婦の妹に任せられた。この康子は夜遅くまで二階の正三の部屋にやつて来ては、のべつまくなしに、いろんなことを喋つた。嫂の失踪しっそうはこんどが初めてではなく、もう二回も康子が家の留守をあずかっていることを正三は知つた。この三十すぎの小姑こじゅうとの口から描写される家の空気は、いろんな臆測おくそくと歪わいきよく曲に満ちていたが、それだけに正三の頭脳に熱っぽくこびりつくものがあつた。

……暗幕を張った奥座敷に、飛きり贅ぜいたく沢どんすな緞子の炬燵蒲団が、スタンドの光に射られて紅く燃あかえている、——その側に、氣の抜けたような順一の姿が見かけられることがあつた。その光景は正三に何かやりきれないものをつたえた。だが、翌朝になると順一は作業服を着込んで、せっせと疎開の荷造を始めている。その顔は一瞬に傲岸ごうがんな殺氣を含んでいた。……それから時々、市外電話がかかつて来ると、長兄は忙しげに出掛けて行く。高須には誰か調停者がいるらしかった——、が、それ以上のことは正三にはわからなかつた。

……妹はこの数年間の嫂の変貌へんぼうぶ振りを、——それは戦争のためあらゆる困苦を強しいられて来た自分と比較して、——戦争によ

つて栄耀^{えいよう}栄華をほしいままにして来たものの姿として、そして

この訳のわからない今度の失踪も、更年期の生理的現象だろうかと、何かもの恐しげに語るのであった。……だらだらと妹が喋っている、清二がやって来て黙って聴^きいていることがあった。

「要するに、勤労精神がないのだ。少しは工員のことも考えてくれたらいいのに」と次兄はぽつんと口を挿^{はさ}む。「まあ、立派な有閑マダムでしょう」と妹も頷^{うなず}く。「だが、この戦争の虚偽が、今

ではすべての人間の精神を破壊してゆくのではないかしら」と、正三が云いだすと「ふん、そんなまわりくどいことではない、だんだん栄耀の種が尽きてゆくので、嫂はむかつ腹たてだしたのだ」と清二はわらう。

高子は家を飛出して、一週間あまりすると、けろりと家に帰つて来た。だが、何かまだ割りきれないものがあるらしく、四五日すると、また行方を晦ゆくえしました。すると、また順一の追求が始まった。「今度は長いぞ」と順一は昂こう然ぜんとして云い放った。「愚図ぐずすれば、皆から馬鹿にされる。四十にもなつて、碌ろくに人に挨あいさついさつ拶さつもできない奴やつばかりじゃないか」と弟達にあてこすることもあつた。……正三は二人の兄の性格のなかに彼と同じものを見出みいだすことがあつて、時々、厭いやな氣持がした。森製作所の指導員をしている康子は、兄たちの世間に対する態度の拙劣さを指摘するのだった。その拙劣さは正三にもあつた。……しかし、長い間、離れているうちに、何と兄たちはひどく變つて行つたことだろう。

それでは正三自身はちつとも変らなかつたのだろうか。……否。みんなが、みんな、日毎ひごとに迫る危機に晒さらされて、まだまだ変ろうとしているし、変つてゆくに違いない。ぎりぎりのところをみとどけなければならぬ。——これが、その頃の正三に自然に浮んで来るテーマであつた。

「来たぞ」といつて、清二は正三の眼の前に一枚の紙片を差出した。点呼令状であつた。正三はじつとその紙に眼をおとし、印刷の隅々すみずみまで読みかえした。

「五月か」と彼はそう呟つぶやいた。正三は昨年、国民兵の教育召集を受けた時ほどにはもう驚かなかつた。がしかし清二は彼の顔に漾

う苦悶^{くもん}の表情をみてとつて、「なあに、どっちみち、今となつては、内地勤務だ、大したことないさ」と軽くうそぶいた。……五月といえ、二カ月さきのことであつたが、それまでこの戦争が続くだろうか、と正三は窃^{ひそ}かに考え耽^{ふけ}つた。

何ということなしに正三は、ぶらぶらと街をよく散歩した。妹の息子^{むすこ}の乾一を連れて、久し振りに泉邸へも行つてみた。昔、彼が幼かつたとき彼もよく誰かに連れられて訪れたことのある庭園だが、今も淡い早春の陽^ひざしのなかに樹木や水はひっそりとしていた。絶好の避難場所、そういう想念がすぐ閃^{ひら}めくのであつた。……映画館は昼間から満員だつたし、盛場の食堂はいつも賑^{にぎ}わつていた。正三は見覚えのある小路を選んで歩いてみたが、どこ

にももう子供心に印されていた懐^{なつか}しいものは見^み出せなかつた。下士官に引率された兵士の一隊が悲壮な歌をうたいながら、突然、四つ角から現れる。頭髮に白鉢^{しろはちまき}巻をした女子勤労学徒の一隊が、兵隊のような歩調でやって来るのともすれちがつた。

……橋の上に佇^{たたず}んで、川上の方を眺めると、正三の名称を知らない山々があつたし、街のはての瀬戸内海の方角には島山が、建物の蔭^{かげ}から顔^{のぞ}を覗けた。この街を包圍しているそれらの山々に、正三はかすかに何かよびかけたいものを感じはじめた。……ある夕方、彼はふと町角を通りすぎる二人の若い女に眼が惹きつけられた。健康そうな肢体^{したい}と、豊かなパーマネントの姿は、明日の新しいタイプかとちよつと正三の好奇心をそそつた。彼は彼女たち

の後を追ひ、その会話を漏れ聴こうと試みた。

「お芋がありさえすりゃあ、ええわね」

間ののびた、げっそりするような声であつた。

森製作所では六十名ばかりの女子学徒が、縫工場の方へやつて来ることになつてゐた。学徒受入式の準備で、清二は張切つてゐたし、その日が近づくに つれて、今迄^{まで}ぶらぶらしてゐた正三も自然、事務室の方へ姿を現し、雑用を手伝わされた。新しい作業服を着て、ガラガラと下駄をひきずりながら、土蔵の方から椅子を運んでくる正三の様子は、慣れない仕事に抵抗しようとするような、ぎこちなさがあつた。……椅子が運ばれ、幕が張られ、それ

に清二の書いた式順の項目が掲示され、式場は既に整っていた。

その日は九時から式が行われるはずであった。だが、早朝から発せられた空襲警報のために、予定はすっかり狂ってしまった。

「……備前岡山、備後灘、松山上空」とラジオは艦載機来襲を

刻々と告げている。正三の身支度が出来た頃、高射砲が唸りだし

た。この街では、はじめてきく高射砲であつたが、どんよりと曇

った空がかすかに緊張して来た。だが、機影は見えず、空襲警報

は一旦、警戒警報に移ったりして、人々はただそわそわしてい

た。……正三が事務室へ這入って行くと、鉄兜を被った上田

の顔と出逢った。

「とうとう、やって来ましたの、なんちゆうことかいの」

と、田舎いなかから通勤して来る上田は彼に話しかける。その逞たくましい
 体軀たいくや淡泊な心を現している相手の顔つきは、いまも何となしに
 正三に安堵あんどの感を抱いだかせるのであつた。そこへ清二のジャンパー
 姿が見えた。顔は颯さつ爽そうと笑えみを浮べようとして、眼はキラキラ
 輝いていた。……上田と清二が表の方へ姿を消し、正三ひとりが
 椅子に腰を下ろしていた時であつた。彼は暫しばくらぼんやりと何も考
 えてはいなかつたが、突然、屋根の方を、ビュンと唸うなる音がして、
 つづいて、パリパリと何か裂ける響がした。それはすぐ頭上に墜お
 ちて来そうな感じがして、正三の視覚はガラス窓の方へつつ走つ
 た。向うの二階の檐のきと、庭の松の梢こずえが、一瞬、異常な密度で網膜
 に映じた。音響はそれきり、もうきこえなかつた。暫くすると、

表からドヤドヤと人々が帰つて来た。「あ、魂消た、度胆どぢもを抜かれたわい」と三浦は歪ゆがんだ笑顔をしていた。……警報解除になると、往來をぞろぞろと人が通りだした。ざわざわしたなかに、どこか浮々した空気さえ感じられるのであった。すぐそこで拾ったのだといって誰かが砲弾の破片を持って来た。

その翌日、白鉢巻をした小さな女学生の一クラスが校長と主任教師に引率されてぞろぞろとやって来ると、すぐに式場の方へ導かれ、工員たちも全部着席した頃、正三は三浦と一緒に一番後からしんがりの椅子に腰を下ろしていた。県庁動員課の男の式辞や、校長の訓示はいい加減に聞流していたが、やがて、立派な国民服姿の順一が登壇すると、正三は興味をもって、演説の一言一句を

ききとった。こういう行事には場を踏んで来たものらしく、声も態度もキビキビしていた。だが、かすかに言葉に——というよりも心の矛盾に——つかえているようなところもあつた。正三がじろじろ観察していると、順一の視線とピツタリ出喰でくわした。それ何かに挑いどみかかるような、不思議な光を放つていた。……学徒の合唱が終ると、彼女たちはその日から賑にぎやかに工場へ流れて行つた。毎朝早くからやつて来て、夕方きちんと整列して先生に引率されながら帰つてゆく姿は、ここの製作所に一脈の新鮮さを齎もたらし、多少の潤いを混えるのであつた。そのいじらしい姿は正三の眼に映つた。

正三は事務室の片隅かたすみで釦ボタンを数えていた。卓の上に散らかつた

釦を百箇ずつ纏めればいいのであるが、のろのろと馴れない指さきで無器用なことを続けていると、来客と応対しながらじろじろ眺めていた順一はどうとう堪りかねたように、「そんな数え方があるか、遊びごとではないぞ」と声をかけた。せつせと手紙を書きつづけていた片山が、すぐにペンを擱いて、正三の側にやって来た。「あ、それですか、それはこうして、こんな風にやって御覧なさい」片山は親切に教えてくれるのであった。この彼よりも年下の、元気な片山は、恐いほど気がきいていて、いつも彼を圧倒するのであった。

艦載機がこの街に現れてから九日目に、また空襲警報が出た。

が、豊後水道から侵入した編隊は佐田岬で迂廻し、続々と九州へ向うのであった。こんどは、この街には何ごともなかったものの、この頃になると、遽かに人も街も浮足立って来た。軍隊が出動して、街の建物を次々に破壊して行くと、昼夜なしに疎開の馬車が絶えなかった。

昼すぎ、みんなが外出したあとの事務室で、正三はひとり岩波新書の『零の発見』を読み耽つていた。ナポレオン戦役の時、ロシア軍の捕虜になったフランスの一士官が、憂悶のあまり数学の研究に没頭していたという話は、妙に彼の心に触れるものがあった。……ふと、そこへ、せかせかと清二が戻って来た。何かよほど興奮しているらしいことが、顔つきに現れていた。

「兄貴はまだ歸らぬか」

「まだらしいな」正三はぼんやり^{こた}応えた。相変らず、順一は留守がちのことが多く、高子との紛争も、その後どうなっているのか、第三者には把^{つか}めないのであつた。

「ぐずぐずしてはいられないぞ」清二は怒気を帯びた声で話した。「外へ行つて見て来るといい。竹屋町の通りも平田屋町辺もみんな取払われてしまったぞ。被服^{ひふくししょう}支廠もいいよ疎開だ」

「ふん、そういうことになったのか。してみると、広島は東京よりまず三月ほど立遅れていたわけだね」正三が何の意味もなくそんなことを^{つぶや}呟くと、

「それだけ広島が遅れていたのは有難いと思わねばならぬではな

いか」と清二は眼をまじまじさせてなおも硬い表情をしていた。

……大勢の子供を抱えた清二の家は、近頃は次から次へとごつたかえす要件で紛糾していた。どの部屋にも疎開の衣類が跳繰りだされ、それに二人の子供は集団疎開に加わって近く出発することになっていたので、その準備だけでも大変だった。手際のわるい光子はのろのろと仕事を片づけ、どうかすると無駄話に時を浪費している。清二は外から帰って来ると、いつも苛々した気分いらいらで妻にあたり散らすのであったが、その癖、夕食が済むと、奥の部屋に引籠ひきこもって、せつせとミシンを踏んだ。リュックサックなら既に二つも彼の家にはあったし、急ぐ品でもなさそうであった。清二はただ、それを拵こしらえる面白さに夢中だった。「なあにくそ、

なあにくそ」とつぶやきながら、針を運んだ。「職人なんかに負けてたまるものか」事実、彼の拵えたりユツクは下手へたな職人の品よりか優秀であつた。

……こうして、清二は清二なりに何か氣持を紛らし続けていたのだが、今日、被服支廠に出頭すると、工場疎開を命じられたのには、急に足あしもと許が揺れだす思いがした。それから歸路、竹屋町辺まで差しかかると、昨日まで四十何年間も見馴れた小路が、すっかり齒の抜けたようになっていて、兵隊は滅茶苦茶に鉈なたを振るっている。二十代に二三年他郷に遊学したほかは、殆どこの郷土を離れたこともなく、与えられた仕事を堪えしのび、その地位も漸く安定ようやしていた清二にとって、これは堪えがたいことであつた。

……一体全体どうなるのか。正三などにわかることではなかった。彼は、一刻も速く順一に会って、工場疎開のことを告げておきたかった。親身で兄と相談したいことは、いくらもあるような気持ちがした。それなのに、順一は順一で高子のことには気を奪われ、今は何のたよりにもならないようであつた。

清二はゲートルをとりはずし、暫く^{しばらく}ぼんやりしていた。そのうちに上田や三浦が帰つて来ると、事務室は建物疎開の話で持ちきつた。「乱暴なことをするのう。うちに、^{のこぎり}鋸で柱をゴシゴシ引いて、縄^{なわ}かけてエンヤサエンヤサと引張り、それで片っぱしからめいで行くのだから、瓦^{かわら}も何もわや苦茶じゃ」と上田は兵隊の早^{はや}業^{わざ}に感心していた。「永田の紙屋なんか可^{かわい}哀^{そう}相なものさ。あ

の家は外から見ても、それは立派な普請だが、親爺さん床柱を撫でてわいわい泣いたよ」と三浦は見てきたように語る。すると、清二も今はニコニコしながら、この話に加わるのであった。そこへ冴えない顔つきをして順一も戻って来た。

四月に入ると、街にはそろそろ嫩葉も見えだしたが、壁土の土砂が風に煽られて、空気はひどくザラザラしていた。車馬の往来は絡繹とつづき、人間の生活が今はむき出しで晒されていた。「あんなものまで運んでいる」と、清二は事務室の窓から外を眺めて笑った。大八車に雉子の剥製が揺れながら見えた。「情ないものじゃないか。中国が悲惨だとか何とか云いながら、こちら

だつて中国のようになってしまつたじゃないか」と、流転の相に^{すがた}心を打たれてか、順一もつぶやいた。この長兄は、要心深く戦争の批判を避けるのであつたが、硫黄島が陥落した時には、「東条なんか八つ裂きにしてもあきたらない」と漏^{もら}した。だが、清二が工場疎開のことを急^せかすと、「被服支廠から真先に浮足立ったりしてどうなるのだ」と、あまり賛成しないのであつた。

正三もゲートルを巻いて外出することが多くなつた。銀行、県庁、市役所、交通公社、動員署——どこへ行つても簡単な使いであつたし、帰りにはぶらぶらと巷^{ちまた}を見て歩いた。……堀川町の通りがぐいと思いきり切開かれ、土蔵だけを残し、ギラギラと破壊の跡が遠方まで展望されるのは、印象派の絵のようであつた。こ

れはこれで趣もある、と正三は強いてそんな感想を抱こうとした。すると、ある日、その印象派の絵の中に真白な鴉かもめが無数に動いていた。勤労奉仕の女学生たちであつた。彼女たちはピカピカと光る破片の上におりたち、白い上衣うわぎに明るい陽光を浴びながら、てんでに弁当を披ひらいているのであつた。……古本屋へ立寄つてみて、書籍の変動が著しく、狼狽ろうばいと無秩序がここにも窺うかがわれた。「何か天文学の本はありませんか」そんなことを尋ねている青年の声がふと彼の耳に残った。

……電気休みの日、彼は妻の墓を訪れ、その序ついでに饒津公園の方を歩いてみた。以前この辺は花見遊山はなみゆざんの人出で賑にぎわつたものだが、そうおもいながら、ひっそりとした木蔭こかげを見やると、老婆と

小さな娘がひそひそと弁当をひろげていた。桃の花が満開で、柳の緑は燃えていた。だが、正三にはどうも、まともに季節の感覚が映って来なかった。何かがずれさがって、恐しく調子を狂わしている。——そんな感想を彼は友人に書き送った。岩手県の方に疎開している友からもよく便り^{たよ}があつた。「元気でいて下さい。細心にやって下さい」そういう短い言葉の端にも正三は、ひたすら終戦の日を祈っているものの氣持を感じた。だが、その新しい日まで己^{おれ}は生きのびるだろうか。……

片山のところに召集令状がやって来た。精悍^{せいかん}な彼は、いつものように冗談をいいながら、てきぱきと事務の後始末をして行く

のであつた。

「これまで点呼を受けたことはあるのですか」と正三は彼に訊ねた。

「それも今年はじめてある筈だったのですが、……いきなりこれでさあ。何しろ、千年に一度あるかないかの大きいさですよ」と片山は笑つた。

長い間、病氣のため姿を現さなかつた三津井老人が事務室の片隅から、憂わしげに彼等の様子を眺めていたが、このとき静かに片山の側に近寄ると、

「兵隊にならたら、馬鹿になりなさいよ、ものを考えてはいけませんよ」と、息子に云いきかすように云いだした。

……この三津井老人は正三の父の時代から店にいた人で、子供のとき正三は一度学校で気分が悪くなり、この人に迎えに来てもらった記憶がある。そのとき三津井は青ざめた彼を励しながら、川のほとりで嘔吐する肩を撫でてくれた。そんな、遠い、細かなことを、無表情に近い、窄すぼんだ顔は憶おぼえていてくれるのだろうか。正三はこの老人が今日のような時代をどう思っているか、尋ねてみたい気持ちになることもあった。だが、老人はいつも事務室の片隅で、何か人を寄せつけかたくなない頑かたくななものを持っていた。

……あるとき、経理部から、暗幕につける環を求めて来たことがある。上田が早速さつそく、倉庫から環の箱を取出し、事務室の卓に並べると、「そいつは一箱いくつ這入はいっていますか」と経理部の

兵は訊ねた。「千箇でさあ」と上田は無造作に答えた。隅の方で、じろじろ眺めていた老人はこのとき急に言葉をさし挿^{はさ}んだ。

「千箇？ そんな筈はない」

上田は不思議そうに老人を眺め、

「千箇でさあ、これまでいつもそうでしたよ」

「いいや、どうしても違う」

老人は立上つて秤^{はかり}を持って来た。それから、百箇の環の目方を

測ると、次に箱全体の環を秤にかけた。全体を百で割ると、七百箇であつた。

森製作所では片山の送別会が行われた。すると、正三の知らぬ

人々が事務室に現れ、いろんなものをどこから整えてくるのであった。順一の加わっている、さまざまなグルウプ、それが互に物資の融通をし合っていることを正三は漸く気づくようになった。……その頃になると、高子と順一の長い間の葛藤は結局、曖昧になり、思いがけぬ方角へ解決されてゆくのであった。

疎開の意味で、高子には五日市町の方へ一軒、家を持たず、そして森家の台所は恰度、息子を学童疎開に出して一人きりになつてゐる康子に委ねる、——そういうことが決定すると、高子も晴れがましく家に戻つて来て、移転の荷拵えをした。だが、高子にもまして、この荷造に熱中したのは順一であつた。彼はいろんな品物に丁寧に綱をかけ、覆いや杵を拵えた。そんな作業の合

間には、事務室に戻り、チェック・プロテクターを使ったり、来客と応対した。夜は妹を相手にひとりで晩酌をした。酒はどこから這入って来たし、順一の機嫌きげんはよかった……

と、ある朝、BGMがこの街の上空を掠かすめて行つた。森製作所の縫工場にいた学徒たちは、一斉に窓からのぞき、屋根の方へ匍はい出し、空に残る飛行機雲をみとれた。「綺麗きれだわね」「おお速いこと」と、少女たちはてんでに嘆声を放つ。BGMも、飛行機雲も、この街に姿を現したのはこれがはじめてであつた。——昨年来、東京で見なれていた正三には久し振りに見る飛行機雲であつた。その翌日、馬車が来て、高子の荷は五日市町の方へ運ばれて行つた。「嫁入りのやりなおよすよ」と、高子は笑いながら、近

所の人々に挨拶あいさつして出発した。だが、四五日すると、高子は改

めて近所との送別会に戻つて来た。電気休業で、朝から台所には

もちうす

餅臼が用意されて、順一や康子は餅搗もちつきの支度したくをした。そのう

ちに隣組の女達がそろそろと台所にやつて来た。……今では正三

も妹の口から、この近隣の人々のことも、うんざりするほどきか

されていた。誰と誰とが結托けったくしていて、何処どこと何処が対立し、

いかに統制をくぐり抜けてみんなそれぞれ遣繰やりくりをしているか。

台所に姿を現した女たちは、みんな一筋縄ひとすじなわではゆかぬ相貌そうぼうで

あつたが、正三などの及びもつかぬ生活力と、虚偽を無邪気に振

舞う本能をさずかっているらしかった。……「今のうちに飲んで

おきましようや」と、そのころ順一のところにはいろんな仲間が

宴会の相談を持ちかけ、森家の台所は賑わった。そんなとき近所のおかみさん達もやつて来て加勢するのであった。

正三は夢の中で、嵐あらしが揉もみくちやにされて墜おちているのを感じた。つづいて、窓ガラスがドシン、ドシンと響いた。そのうちに、「煙が、煙が……」と何処かすぐ近くで叫んでいるのを耳にした。ふらふらする足どりで、二階の窓際まどぎわへ寄ると、遙はるか西の方の空に黒煙こくえんが濛々もうもうと立騰たちつていた。服装をととのえ階下に行つた時には、しかし、もう飛行機は過ぎてしまった後であつた。：清二の心配そうな顔があつた。「朝寝なんかしている際じやないぞ」と彼は正三を叱しかりつけた。その朝、警報が出たことも正三

はまるで知らなかったのだが、ラジオが一機、浜田（日本海側、島根県の港）へ赴いたと報じたかとおもうと、間もなくこれであった。紙屋町筋に一筋パラパラと爆弾が撒かれて行つたのだ。四月末日のことであつた。

五月に入ると、近所の国民学校の講堂で毎晩、点呼の予習が行われていた。それを正三は知らなかったのであるが、漸くそれに気づいたのは、点呼前四日のことであつた。その日から、彼も早目に夕食を了えては、そこへ出掛けて行つた。その学校も今では既に兵舎に充てられていた。燈の薄暗い講堂の板の間には、相当年輩の一群と、ぐんと若い一組が入混つていた。血色のいい、若

い教官はピンと身をそりかえらすような姿勢で、ピカピカの長靴^{かすね}の脛^{すね}はゴムのように弾^{はず}んでいた。

「みんなが、こうして予習に来ているのを、君だけ気づかなかったのか」

はじめ教官は穏かに正三に訊ね、正三はぼそぼそと弁解した。

「声が小さい！」

突然、教官は、吃驚^{びっくり}するような声で呶鳴^{どな}った。

……そのうち、正三もここでは皆がみんな蛮声^{やけ}の出し合いをしていることに気づいた。彼も首を振るい、自棄^{やけ}くそこに出来るかぎりの声を絞りだそうとした。疲れて家に戻ると、怒号の調子が身^み裡^{うち}に渦巻いた。……教官は若い一組を集めて、一人一人に点呼の

練習をしていた。教官の問に対して、青年たちは元気よく答え、練習は順調に進んでいた。足が多少跛びつこの青年がでてくると、教官は壇上から彼を見下ろした。

「職業は写真屋か」

「左様でございます」青年は腰の低い商人口調でひよこんと応こたえた。

「よせよ、ハイ、で結構だ。折角、今迄までいい気分だったのに、そんな返事されてはげっさりしてしまう」と教官は苦笑いした。この告白で正三はハツと気づいた。陶酔だ、と彼はおもった。

「馬鹿馬鹿しいきわみだ。日本の軍隊はただ形式に陶酔しているだけだ」家に帰ると正三は妹の前でぺらぺらと喋しゃべった。

今にも雨になりそうな薄暗い朝であつた。正三はその国民学校の運動場の列の中にいた。五時からやって来たのであるが、訓示や整列の繰返しばかりで、なかなか出発にはならなかった。その朝、態度がけしからんと云つて、一青年の頬ほおを張り飛ばした教官は、何かまだ弾む氣持を持てあましているようであつた。そこへ恰度ちやうど、ひどく垢あかじみた中年男がやって来ると、もそもそと何か訴えはじめた。

「何だと！」と教官の声だけが満場にききとれた。「一度も予習に出なかつたくせにして、今朝だけ出るつもりか」

教官はじろじろ彼を眺めていたが、

「裸になれ！」と大^{だい}喝^{かつ}した。そう云われて、相手はおずおずと^{ボタンはず}鉤^{かぎ}を外^{はず}しだした。が、教官はいよいよ猛^{たけ}つて来^きた。

「裸になるとは、こうするのだ」と、相手をぐんぐん運動場の正面に引張つて来ると、くるりと後向きにさせて、パツとシャツを剥^はぎとつた。すると青緑色の靄^{もや}が立^{たち}罩^こめた薄暗い光線の中に、瘡^{かさ}蓋^{さぶた}だらけの醜^{みにく}い背中が露^{あらわ}出^でされた。

「これが絶対安静を要^{から}した軀^{からだ}なのか」と、教官は次の動作に移るため一寸間^{ちよつと}を置いた。

「不心得者！」この声と同時にピシりと鉄^{てつ}拳^{けん}が閃^{ひらめ}いた。と、その時、校庭にあるサイレンが警戒警報の唸^{うな}りを放ちだした。その、もの哀^{かな}しげな太い響は、この光景にさらに凄^{せい}惨^{さん}な趣を加えるよ

うであつた。やがてサイレンが歇むと、教官は自分の演じた効果に大分満足したらしく、

「今から、この男を憲兵隊へ起訴してやる」と一同に宣言し、それから、はじめて出発を命じるのであつた。……一同が西練兵場へ差しかけると、雨がぽちぽち落ちだした。荒々しい歩調の音が堀に添つて進んだ。その堀の向うが西部二部隊であつたが、仄暗い緑の堤にいま躑躅の花が血のように咲乱れているのが、ふと正三の眼に留つた。

康子の荷物は息子の学童疎開地へ少し送つたのと、知り合いの田舎へ一箱預けたほかは、まだ大部分順一の家の土蔵にあつた。

身のまわりの品と仕事道具は、ミシンを据えた六畳の間に置かれたが、部屋一杯、仕かか^{ひろ}りの仕事を展^{ひろ}げて、その中でのぼせ気味に働くのが好きな彼女は、そこが乱雑になることは一向気にならなかった。雨がちの天気で、早くから日が暮れると鼠^{ねずみ}がごそごそ這^はいのぼつて、ボール函^{ばこ}の蔭へ隠れたりした。綺麗好きの順一は時々、妹を叱りつけるのだが、康子はその時だけちよつと片附けてみるものの、部屋はすぐ前以上に乱れた。仕事やら、台所やら、掃除やら、こんな広い家を兄の気に入るとおりに出来ない、と、よく康子は清二に零^{こぼ}すのであった。……五日市町へ家を借りて以来、順一はつきつきに疎開の品を思いつき、殆ど毎日、荷造に余念ないのだったが、荷を散乱した後は家のうちをきちんと片附け

ておく習慣だった。順一の持逃げ用のリュックサックは食糧品が詰められて、縁側の天井から吊^{つる}されている綱に括^{くく}りつけてあった。つまり、鼠の侵害を防ぐためであつた。……西崎に縄を掛けさせた荷を二人で製作所の片隅へ持運ぶと、順一は事務室で老眼鏡をかけ二三の書類を読み、それから不意と風呂場へ姿を現し、ゴシゴシと流し場の掃除に取掛る。

……この頃、順一は身も心も独^こ楽^まのようによく廻転した。高子を疎開させたものの、町会では防空要員の疎開を拒み、移動証明を出さなかつた。随つて、順一は食糧も、高子のところへ運ばねばならなかつた。五日市町までの定期乗車券も手に入れたし、米はこと欠かないだけ、絶えず流れ込んで来る。……風呂掃除が済

む頃、順一にはもう明日の荷造のプランが出来ている。そこで、
 手足を拭い、^{ぬぐ}下駄をつつかけ、土蔵を覗いてみるのであったが、
 入口のすぐ側に乱雑に積み重ねてある康子の荷物——何か取出し
 て、そのまま蓋の^{ふた}開いている箱や、蓋から喰^はみだしている衣類：
 …が、いつものことながら目につく。暫く順一はそれを冷然と見
 詰めていたが、ふと、ここへはもつと水^{みず}桶^{おけ}を備えつけておいた
 方がいいな、と、ひとり^{うなず}頷くのであった。

三十も半ばすぎの康子は、もう女学生の際の明るい頭には還^{かえ}れ
 なかったし、澄んだ魂というものは何時^{いつ}のまにか見喪^{みうしな}われてい
 た。が、そのかわり何か今では不貞^{ふてぶて}不貞しいものが身に備わつて
 いた。病弱な夫と死別し、幼児を抱^{かか}えて、順一の近所へ移り棲^すむ

ようになった頃から、世間は複雑になったし、その間、一年あまり洋裁修業の旅にも出たりしたが、生活難の底で、しゅうとめ 姑や隣組や嫂や兄たちに小衝こづかれてゆくうちに、多少ものの裏表もわかって来た。この頃、何よりも彼女にとつて興味があるのは、他人のことで、人の氣持をあれこれ臆測おくそくしたりすることが、殆ど病みつきになっていた。それから、彼女は彼女流に、人を掌中にまるめる、というより人と面白く交際つきあつて、ささやかな愛情のやりとりをするることに、氣を紛らすのであった。半年前から知り合いになった近所の新婚の無邪気な夫妻もたまらなく好意が持てたので、順一が五日市の方へ出掛けて行つて留守の夜など、康子はこの二人を招待して、どら焼を拵えた。燈火管制の下で、明日をも知れない

脅威のなかで、これは飯事遊ままごとあそびのようにたのしい一ときであつた。

……本家の台所を預かるようになってからは、甥おいの中学生も

「姉さん、姉さん」とよく懐なついた。二人のうち小さい方は母親に

くつついて五日市町へ行つたが、煙草の味も覚えはじめた、上

方の中学生は盛場の夜の魅力に惹ひかれてか、やはり、ここに踏ふみ

とどまつていた。夕方、三菱工場から戻つて来ると、早速さつそく彼は

台所をのぞく。すると、戸棚とだなには蒸パンやドウナツツが、彼の氣

に入るようにいつも目さきを変えて、拵しらえてあつた。腹一杯、夕

食を食べると、のそりと暗い往来へ出掛けて行き、それから戻つ

て来ると一風呂浴びて汗をながす。暢氣のんきそうに湯のなかで大声で

歌っている節まわしは、すっかり職工氣どりであつた。まだ、顔

は子供っぽかったが、^{からだ}軀は壮丁なみに発達していた。康子は甥の

歌声をきくと、いつもくすくす笑うのだった。……^{あん}餡を入れた饅^ま

^{んじゅう}

頭^{づか}を拵え、晩酌の後出すと、順一はひどく賞^ほめてくれる。青

いワイシャツを着て若返ったつもりの順一は、「肥^{ふと}ったではない

か、ホホウ、日々に肥ってゆくぞ」と機嫌よく冗談を云うことが

あった。実際、康子は下腹の方が出張って、顔はいつのまにか二

十代の艶^{つや}を湛^{たた}えていた。だが、週に一度位は五日市町の方から嫂

が戻って来た。派手なモンペを着た高子は香料のにおいを撒きち

らしながら、それとなく康子の遣^{やり}口^{くち}を監視に来るようであった。

そういうとき警報が出ると、すぐこの高子は顔を顰^{しか}めるのであつ

たが、解除になると、「さあ、また警報が出るとうるさいから帰

りましよう」とそそくさと立去るのだった。

……康子が夕餉ゆうげの支度したくにとりかかる頃には大概、次兄の清二がやって来る。疎開学童から来たといつて、嬉うれしそうにハガキを見せることもあつた。が、時々、清二は「ふらふらだ」とか「目眩めまいがする」と訴えるようになった。顔に生氣がなく、焦しょうそう躁そうの色が目だった。康子が握飯を差出すと、彼は黙つてうまそうにパクついた。それから、この家の忙しい疎開振りを眺めて、「ついでに石灯籠も植木もみんな持つて行くといい」など嗤わらうのであつた。

前から康子は土蔵の中に放りっぱなしになつてゐる箆たんすや鏡台が氣かに懸かつていた。「この鏡台は杵わくつくらすといい」と順一も云

つてくれた程だし、一こと彼が西崎に命じてくれれば直ぐ解決するのだったが、己おのれの疎開にかまけている順一は、もうそんなことは忘れたような顔つきだった。直接、西崎に頼むのはどうも気がひけた。高子の命令なら無条件に従う西崎も康子のことになると、とかく渋るようにおもえた。……その朝、康子は事務室から釘くぎぬ拔きを持って土蔵の方へやって来た順一の姿を注意してみると、その顔は穩かに凧ないでいたので、頼むならこの時とおもつて、早速、鏡台のことを持ちかけた。

「鏡台？」と順一は無感動に呟つぶやいた。

「ええ、あれだけでも速く疎開させておきたいの」と康子はとりすが、
「ええ、あれだけでも速く疎開させておきたいの」と康子はとり
速すがに兄の眸ひとみを視つめた。と、兄の視線はちらと脇わきへ外そらさ

れた。

「あんな、がらくた、どうなるのだ」そういうと順一はくると
そつぽを向いて行つてしまった。はじめ、康子はすとんと空虚の
なかに投げ出されたような気持であつた。それから、つぎつぎに
憤りが揺れ、もう凝^{じつ}としていられなかつた。がらくたといつても、
度^{たび}重なる移動のためにあんな風になつたので、彼女が結婚する
時まだ生きていた母親がみたててくれた記念の品であつた。自分
のものになると箒^{ほうき}一本にまで愛着する順一が、この切ない、ひと
の気持は分つてくれないのだろうか。……彼女はまたあの晩の怕^{こわ}
い順一の顔つきを想い浮べていた。

それは高子が五日市町に疎開する手筈のできかかつた頃のこと

であつた。妻のかわりに妹をこの家に移し一切を切廻さすことにすると、順一は主張するのであつたが、康子はなかなか承諾しなかつた。一つには身勝手な嫂に対するあてこすりもあつたが、加計町の方へ疎開した子供のことも気になり、一そのこと保母ほぼとなつて其処そこへ行つてしまおうかとも思い惑つた。嫂と順一とは康子をめぐつて宥めなだたり賺すかしたりしようとするのであつたが、もう夜も更けふかかつていた。

「どうしても承諾してくれないのか」と順一は屹きつとなつてたずねた。

「ええ、やっぱし広島は危険だし、一そのこと加計町の方へ……」と、康子は同じことを繰返した。突然、順一は長火鉢ながひばちの側にあ

つたネーブルの皮を掴むと、向うの壁へピシヤリと擲なげつけた。狂暴な空気がさつと漲みなぎった。「まあ、まあ、もう一ぺん明日までよく考えてみて下さい」と嫂はとりなすように言葉を挿はさんだが、結局、康子はその夜のうちに承諾してしまったのであった。……暫しばらく康子は眼もとがくらくらするような状態で家のうちをあてもなく歩き廻っていたが、何時の間にか階段を昇ると二階の正三の部屋に来ていた。そこには朝っぱらからひとり引籠ひきこもって靴下の修繕をしている正三の姿があった。順一のことを一気に喋り了おわると、はじめて泪なみだがあふれ流れた。そして、いくらか氣持が落着くようであった。正三は憂わしげにただ黙々としていた。

点呼が了つてからの正三は、自分でもどうにもならぬ虚無感に

陥りがちであつた。その頃、用事もあまりなかつたし、事務室へも滅多に姿を現さなくなつていた。たまに出て来れば、新聞を読むためであつた。ドイツは既に無条件降伏をしていたが、今この国では本土決戦が叫ばれ、築城などという言葉が見えはじめていた。正三は社説の裏に何か真相のにおいを嗅ぎとろうとした。しかし、どうかすると、二日も三日も新聞が読めないことがあつた。これまで順一の卓上に置かれていた筈のものが、どういふものか何処かに匿かくされていた。

絶えず何かに追いつめられてゆくような気持でいながら、だらけてゆくものをどうにも出来ず、正三は自らを持てあますように、ぶらぶらと広い家のうちを歩き廻ることが多かつた。……昼時に

なると、女生徒が台所の方へお茶を取りに来る。すると、黒板の
塀^{へい}一重を隔てて、工場の露次の方でいま作業から解放された学徒
たちの賑やかな声がきこえる。正三がこちらの食堂の縁側に腰を
下ろし、すぐ足もとの小さな池に憂鬱^{ゆううつ}な目ざし^{まな}を落していると、
工場の方では学徒たちの体操が始り、一、二、一、二と級長の晴
れやかな号令がきこえる。そのやさしい弾みをもった少女の声だ
けが、奇妙に正三の心を慰めてくれるようであつた。……三時頃
になると、彼はふと思いついたように、二階の自分の部屋に帰り、
靴下の修繕をした。すると、庭を隔てて、向うの事務室の二階で
は、せつせと立働いている女工たちの姿が見え、モーターミシン
の廻転する音響もここまできこえて来る。正三は針のめどに指さ

きを惑わしながら、「これを穿^はいて逃げる時」とそんな念想が閃めくのであった。

……それから日没の街を慄然^{ふぜん}と歩いている彼の姿がよく見かけられた。街はつぎつぎに建ものが取払われてゆくので、思いがけぬところに広場がのぞき、粗末な土の壕^{ごう}が蹲^{すくま}っていた。滅多に電車も通らないただ広い路を曲ると、川に添った堤に出て、崩^{くず}された土塀のほとりに、無花果^{いちじく}の葉が重苦しく茂っている。薄暗くなつたまま容易に夜に溶け込まない空間は、どろんとした湿気が溢^{あふ}れて、正三はまるで見知らぬ土地を歩いているような気持がするのであった。……だが、彼の足はその堤を通りすぎると、京橋のたもと袂へ出、それから更に川に添った堤を歩いてゆく。清二の家の門

口まで来かかると、路傍で遊んでいた姪めいがまず声をかけ、つづいて一年生の甥がすばやく飛びついてくる。甥はぐいぐい彼の手を引張り、固い小さな爪つめで、正三の手首を抓つかるのであった。

その頃、正三は持逃げ用の雑ざつ囊のうを欲しいとおもいだした。警報の度たびごと毎に彼は風呂敷包を持歩いていたが、兄たちは立派なりユツクを持っていたし、康子は肩からさげるカバンを拵そろえていた。布地さえあればいつでも縫ってあげると康子は請合った。そこで正三は順一に話を持ちかけると、「カバンにする布地？」と順一は呟つぶいて、そんなものがあるのか無いのか曖あい昧まいな顔つきであった。そのうちには出してくれるのかと待っていたが一向はつきりしないので、正三はまた順一に催促してみた。すると、順一は意

地悪そうに笑いながら、「そんなものは要らないよ。担いで逃げたいのだったら、そこに吊してあるリュツクのうち、どれでもいいから持って逃げてくれ」と云うのであった。そのカバンは重要書類とほんの身につける品だけを容れるためなのだと、正三がいくら説明しても、順一はとりあつてくれなかつた。……「ふーん」と正三は大きな溜息をついた。^{ためいき}彼には順一の心理がどうも把握できないのであった。「拗ねてやるといいのよ。わたしなんか泣いたりして困らしてやる」と、康子は順一の操縦法を説明してくれた。鏡台の件にしても、その後けろりとして順一は疎開させてくれたのであった。だが、正三にはじわじわした駈引^{かけひき}はできなかつた。……彼は清二の家へ行ってカバンのことを話した。すると清二は

ちようど
恰度いい布地を取出し、「これ位あつたら作れるだろう。米一斗というところだが、何かよこすか」というのであつた。布地を手に入れると正三は康子にカバンの製作を頼んだ。すると、妹は、「逃げることばかり考えてどうするの」と、これもまた意地のわるいことを云うのであつた。

四月三十日に爆撃があつたきり、その後この街はまだ空襲を受けなかつた。^{したが}随つて街の疎開にも緩急があり、人心も緊張と弛^し緩^{かん}が絶えず交替していた。警報は殆ど連夜出たが、それは機雷投下ときまっていたので、森製作所でも監視当番制を廃止してしまつた。だが、本土決戦の気配は次第にもう濃厚になつていた。

「畑元帥^{はた}が広島に来てゐるぞ」と、ある日、清二は事務室で正三に云つた。「東練兵場に築城本部がある。広島が最後の牙城になるらしいぞ」そういうことを語る清二は——多少の懷疑も持ちながら——正三にくらべると、決戦の心組に氣負つてゐる風にもみえた。……「畑元帥がのう」と、上田も間のびした口調で云つた。「ありやあ、二葉の里で、毎日二つずつ大きな饅頭^{まんじゅう}を食べてんだそうな」……夕刻、事務室のラジオは京浜地区にB25五百機来襲を報じていた。聾^{しかめつら}面して聴^きいていた三津井老人は、
「へーえ、五百機！……」

と思わず驚嘆の声をあげた。すると、皆はくすくす笑い出すのであつた。

……ある日、東警察署の二階では、市内の工場主を集めて何か訓示が行われていた。代理で出掛けて来た正三は、こういう席にははじめてであつたが、興もなさげにひとり勝手なことを考えていた。が、そのうちにふと気がつく、弁士が入替つて、いま体た軀堂々たる巡査が喋りだそうとするところであつた。正三はその風采ふうさいにちよつと興味を感じはじめた。体格といい、顔つきといい、いかにも典型的な警察官というところがあつた。「ええ、これから防空演習の件について、いささか申上げます」と、その声はまた明朗闊かつたつ達であつた。……おやおや、全国の都市がいま彈雨の下に晒さらされている時、ここでは演習をやるといふのかしら、と正三は怪しみながら耳を傾けた。

「ええ、御承知の通り現在、我が広島市へは東京をはじめ、名古屋、^{あるい}或は大阪、神戸方面から、つまり各方面の罹^{りさいしや}災者が続々と相次いで流込んでおります。それらの罹災者が我が市民諸君に語るところは何であるかと申しますと、『いやはや、空襲は^{こわ}怕かつた怕かつた。何んでもかんでも速く逃げ出すに限る』と、ほざくのであります。しかし、^{ひっきよう}畢 竟 するに彼等は防空上の惨敗者であり、^{あわれ}憐むべき愚民であります。自ら^{たの}恃むところ厚き我々は決して彼等の言に耳を傾けてはならないのであります。なるほど戦局は^{かれつ}苛烈であり、空襲は激化の一路にあります。だが、いかなる危険といえども、それに対する^{かつこ}確乎たる防備さえあれば、いささかも^{おそ}怖るには足りないのであります」

そう云いながら、彼はくると黒板の方へ対^むいて、今度は図示に依^よつて、實際的の説明に入つた。……その聊^{いささ}かも不安もなさげな、彼の話をきいていると、實際、空襲は簡單^{めいりよう}明瞭な事柄であり、同時に人の命もまた單純明確な物理的作用の下にあるだけのことのようにおもえた。珍しい男だな、と正三は考えた。だが、このような好漢ロボットなら、いま日本にはいくらでもいるにちがいない。

順一は手ぶらで五日市町の方へ出向くことはなく、いつもリュックサックにこまごました疎開の品を詰込み、夕食後ひとりいそいそと出掛けて行くのであつたが、ある時、正三に「万一の場合

知っていてくれぬと困るから、これから一緒に行こう」と誘った。小さな荷物持たされて、正三は順一と一緒に電車の停車場へ赴いた。おもむ己斐行はなかなかやって来ず、正三は広々とした道路のはてに目をやっていた。が、そのうちに、建物の向うにはつきりと呉娑娑宇山がうずくまっている姿がうつった。さそう

それは今、夏の夕暮の水蒸気を含んで鮮かに生動していた。あざやその山に連なるほかの山々もいつもは仮睡の淡い姿しか示さないのに、今日はおそろしく精気に満ちていた。底知れない姿の中を雲がゆるゆると流れた。すると、今にも山々は揺れ動き、叫びあおうとするようであつた。ふしぎな光景であつた。ふと、この街をめぐる、或る大きなものの構図が、このとき正三の眼に描かれて

来だした。……清冽^{せいれつ}な河川をいくつか乗越え、電車が市外に出
てからも、正三の眼は窓の外の風景に喰入^{くい}っていた。その沿線は
むかし海水浴客で賑わ^{にぎ}ったので、今も窓から吹込む風がふとなつ
かしい記憶のにおいを齎^{もた}らしたりした。が、さきほどから正三を
おどろかしている中国山脈の表情はなおも衰えなかった。暮れか
かった空に山々はいよいよあざやかな緑を投出し、瀬戸内海の島
影もくつきりと浮上った。波が、青い穏かな波が、無限の嵐^{あらし}にあ
おられて、今にも狂いまわりそうに想えた。

正三の眼には、いつも見馴^{みな}れている日本地図が浮んだ。広袤^{こうほう}
はてしない太平洋のはてに、はじめ日本列島は小さな点々として

映る。マリアナ基地を飛立つたB26の編隊が、雲の裏を縫って星のように流れてゆく。日本列島がぐんどこちらに引寄せられる。

八丈島の上で二つに岐^{わか}れた編隊の一つは、まっすぐ富士山の方に

向い、他は、熊野灘^{くまのなだ}に添って紀伊水道の方へ進む。が、その編

隊から、いま一機がふわりと離れると、室戸岬^{むろとみさき}を越えて、ぐん

ぐん土佐湾に向ってゆく。……青い平原の上に泡立ち群^{あわ}がる山脈

が見えてくるが、その峰を飛越えると、鏡のように静まった瀬戸

内海だ。一機はその鏡面に散布する島々を点検しながら、悠然^{ゆうぜん}

と広島湾上を舞っている。強すぎる真昼の光線で、中国山脈も湾

口に臨む一塊の都市も薄紫の朧^{おぼろ}である。……が、そのうちに、宇^う

品港^{しな}の輪郭がはっきりと見え、そこから広島市の全貌^{ぜんぼう}が一目に

瞰^{みおろ}下される。山峽にそって流れている太田川が、この街の入口のところで分岐すると、分岐の数は更に増^ふえ、街は三角洲の上に拡^{ひろが}つてゐる。街はすぐ背後に低い山々をめぐらし、練兵場の四角形が二つ、大きく白く光っている。だが、近頃その川に区切られた街には、いたるところに、疎開跡の白い空地^{あきち}が出来上っている。これは焼夷弾^{しょういだん}攻撃に対して鉄壁の陣を布^しいたというのであろうか。……望遠鏡のおもてに、ふと橋^{きょうりよう}梁が現れる。豆粒ほどの人間の群が今も忙しげに動きまわっている。たしか兵隊にちがいない。兵隊、——それが近頃この街のいたるところを占有しているらしい。練兵場に蟻^{あり}の如^{ごと}くうごめく影はもとより、ちよつとした建物のほとりにも、それらしい影が点在する。……サイレンは

鳴ったのだろうか。荷車がいくつも街中を動いている。街はずれの青田には玩具おもちゃの汽車がのろろ走っている。……静かな街よ、さようなら。B29一機はくるりと舵かじを換え悠然と飛去るのであった。

りゆうきゆう
琉球

列島の戦が終わった頃、隣県の岡山市に大空襲があり、

つづいて、六月三十日の深更から七月一日の未明まで、呉市くれが延

焼した。その夜、広島上空を横切る編隊爆音はつぎつぎに市民の

耳を脅かしていたが、清二も防空頭巾ぼうくうずきんに眼ばかり光らせながら、

森製作所へやって来た。工場にも事務室にも人影はなく、家の玄

関のところに、康子と正三と甥の中学生の三人が蹲うずくまっているのだ

った。たったこれだけで、こんな広い場所を防ぐというのだろうか、——清二はすぐにそんなことを考えるのであった。と、表の方で半鐘が鳴り「待避」と叫ぶ声がきこえた。四人はあたふたと庭の壕^{ごう}へ身を潜めた。密雲の空は容易に明けようともせず、爆音はつぎつぎにききとれた。もののかたちがはつきり見えはじめたころ漸^{ようや}く空襲解除となった。

……その平静に返った街を、ひどく興奮しながら、順一は大急ぎで歩いていった。彼は五日市町で一睡もしなかったし、海を隔てて向うにあかあかと燃える火焰^{かえん}を夜どおし眺めたのだった。うかうかしてはいられない。火はもう踵^{かかと}に燃えついて来たのだ、——そう眩^{つぶや}きながら、一刻も早く自宅に駈^かけつけようとした。電車は

その朝も容易にやって来ず、乗客はみんな茫^{ぼう}とした顔つきであつた。順一が事務室に現れたのは、朝の陽も大分高くなつていた頃であつたが、ここにも茫とした顔つきの睡^{ねむ}そうな人々ばかりと出^で逢^あつた。

「うかうかしている時ではない。早速、工場は疎開させる」

順一は清二の顔を見ると、すぐにそう宣告した。ミシンの取りはずし、荷馬車の下附を県庁へ申請すること、家財の再整理。――順一にはまた急な用件が山積した。相談相手の清二は、しかし、末節に疑義を挿^{はさ}むばかりで、一向てきぱきしたところがなかった。順一はピシピシと鞭^{むち}を振りたいおもいに燃立つのだった。

その翌々日、こんどは広島の大空襲だという噂^{うわさ}がパツと拡^{ひろ}つた。

上田が夕刻、^{りようまつしやう}糧秣^{りやうまっしやう} 廠^{しやう}からの警告を順一に伝えると、順一は

妹^せを急^{いそ}がして夕食を早目にすまし、正三と康子を顧みて云つた。

「儂^{わし}はこれから出掛けて行くが、あとはよろしく頼む」

「空襲警報が出たら逃げるつもりだが……」正三が念を押すと順

一^{うなず}は頷^{うなず}いた。

「駄目らしかったらミシンを井戸へ投込んでおいてくれ」

「蔵の扉を塗りつぶしたら……今のうちにやってしまおうかしら」

ふと、正三は壮烈な氣持が湧^わいて来た。それから土蔵の前に近

づいた。かねて赤土は粘^ねつてあつたが、その土蔵の扉を塗り潰^{つぶ}ぶ

すことは、父の代には遂^{つい}に一度もなかつたことである。梯子^{はしご}を掛

けると、正三はぺたぺたと白壁の扉の隙間すきまに赤土をねじ込んで行った。それが終った頃順一の姿はもうそこには見えなかった。正三は気になるので、清二の家に立寄ってみた。「今夜が危いそうだが……」正三が云うと、「ええ、それがその秘密なのだけど近所の児島さんもそんなことを夕方役所からきいて帰り……」と、何か一生懸命、袋にものを詰めながら光子はだらだらと弁じだした。

一とおり用意も出来て、階下の六畳、——その頃正三は階下で寝るようになっていた、——の蚊帳かやにもぐり込んだ時であつた。ラジオが土佐沖海面警戒警報を告げた。正三は蚊帳の中で耳を澄ました。高知県、愛媛県が警戒警報になり、つづいてそれは空襲

警報に移っていた。正三は蚊帳の外に匍い出すと、ゲートルを捲いた。それから雑囊ざつのうと水筒を肩に交錯させると、その上をバンドで締めた。玄関で靴を探し、最後に手袋を嵌めた時、サイレンが警戒警報を放った。彼はとつと表へ飛び出すと、清二の家の方へ急いだ。暗闇くらやみのなかを固い靴底に抵抗するアスファルトがあつた。正三はぴんと立つてうまく歩いている己の脚を意識した。清二の家の門は開け放たれていた。玄関の戸をいくら叩いても何の手ごたえもない。既に逃げ去った後らしかつた。正三はあたふたと堤の路みちを突きつて栄橋の方へ進んだ。橋の近くまで来た時、サイレンは空襲を唸りだすのであつた。

夢中で橋を渡ると、饒津公園裏の土手を廻り、いつの間にか彼

は牛田方面^{うした}へ向う堤^{ひしめ}まで来ていた。この頃、漸く正三は彼のすぐ
周囲をぞろぞろと犇^{ひしめ}いている人の群に気づいていた。それは老若
男女、あらゆる市民の必死のいでたちであつた。鍋釜^{なべかま}を満載し
たりヤカーや、老母を載せた乳母車^{うばぐるま}が、雑沓^{ざつとう}のなかを掻^かきわ
けて行く。軍用犬に自転車^ひを牽かせながら、颯爽^{さつそう}と鉄兜^{てつかぶと}を
被^{かぶ}つてゐる男、杖^{つえ}にとり縋^{すが}り跛^{びつこ}をひいてゐる老人。……トラック
が来た。馬が通る。薄闇の狭い路上がいま祭日のように賑わつて
いるのだつた。……正三は樹蔭^{こかげ}の水槽^{すいそう}の傍にある材木の上に腰
を下ろした。

「この辺なら大丈夫でしょうか」と通りがかりの老婆^{たず}が訊ねた。
「大丈夫でしょう、川もすぐ前だし、近くに家もないし」そうい

つて彼は水筒の栓せんを捻ひねった。いま広島ひろしまの街の空は茫と白んで、それはもういつ火の手があがるかもしれないようにおもえた。街が全焼してしまつたら、明日から己おれはどうなるのだろう、そう思いつながら、正三は目の前の避難民の行方ゆくえに興味を感じるのであつた。

『ヘルマンとドロテア』のはじめに出て来る避難民の光景が浮んだ。だが、それに較くらべると何とこれは怕おそろしく空白な情景なのだろう。……暫くすると、空襲警報が解除になり、つづいて警戒警報も解かれた。人々はそろそろと堤の路を引上げて行く。正三もその路をひとりひきかえして行つた。路は来た折よりも更に雑沓わめしていた。何か喚わめきながら、担架が相次いでやって来る。病人を運

ぶ看護人たちであつた。

空から撒布さんぷされたビラは空襲の切迫を警告していたし、脅えた市民は、その頃、日没と同時にぞろぞろと避難行動を開始した。まだ何の警報もないのに、川の上流や、郊外の広場や、山の麓ふもとは、そうした人々で一杯になり、叢くさむらでは、蚊帳や、夜具や、炊事道具さえ持出された。朝昼なしに混雑する宮島線の電車は、夕刻になると更に殺氣立つ。だが、こうした自然の本能をも、すぐにその筋はきびしく取締りだした。ここでは防空要員の疎開を認めないことは、既に前から規定されていたが、今度は防空要員の不在をも監視しようとし、各戸に姓名年齢を記載させた紙を貼はり出させた。夜は、橋の袂たもとや辻つじ々に銃剣つきの兵隊や警官が頑張がんばった。

彼等は弱い市民を脅迫して、あくまでこの街を死守させようとするのであったが、窮鼠きゆうその如く追いつめられた人々は、巧みにまたその裏をくぐった。夜間、正三が逃げて行く途上あたりを注意してみると、どうも不在らしい家の方が多いのであった。

正三もまたあの七月三日の晩から八月五日の晩——それが最終の逃亡だった——まで、夜間形勢が怪しげになると忽ち逃たちまげ出すのであった。……土佐沖海面警戒警報が出るともう身支度みじたくに取掛る。高知県、愛媛県に空襲警報が発せられて、広島県、山口県が警戒警報になるのは十分とかからない。ゲートルは暗闇のなかでもすぐ捲けるが、手拭てぬぐいとか靴篋くつぺらとかいう細かなもので正三は鳥渡ちよつと手間どることがある。が、警戒警報のサイレン迄にはきつ

と玄関さきで靴をはいている。康子は康子で身支度をととのえ、やはりその頃、玄関さきに來ている。二人はあとさきになり、門口を出てゆくのであった。……ある町角を曲り、十歩ばかり行くと正三はもう鳴りだすぞとおもう。はたして、空襲警報のものものしいサイレンが八方の闇から喚きあう。おお、何という、低低さまざまの、いやな唸り声だ。これは傷いた獣の慟哭どうこくとでもいうのであろうか。後の歴史家はこれを何と形容するだろうか。――そんな感想や、それから、……それにしても昔、この自分は街にやって来る獅子ししの笛を遠方からきいただけでも真青になつて逃げて行つたが、あの頃の恐怖の純粹さと、この今の恐怖とでは、どうも今では恐怖までが何か鈍重な柢わくに嵌はめこまれている。――

そんな念想が正三の頭に浮ぶのも数秒で、彼は息せききらせて、堤に出る石段を昇っている。清二の家の門口に駈けつけると、一家揃そろって支度を了おえていることもあったが、まだ何の身支度もしていないこともあった。正三がここへ現れると前後して康子は康子でそこへ駈けつけて来る。……「この紐結ひもんで頂戴ちやうだい」と小さな姪が正三に頭巾を差出す。彼はその紐をかたく結んでやると、くるりと姪を背に背負い、皆より一足さきに門口を出て行く。栄橋を渡ってしまうと、とにかく吻ほっとして足どりも少し緩ゆるくなる。鉄道の踏切を越え、饒津にぎつの堤に出ると、正三は背負っていた姪を叢に下ろす。川の水は灰白ほのじろく、杉の大本は黒い影を路に投げてゐる。この小さな姪はこの景色を記憶するであろうか。幼い日々

が夜毎よごと、夜毎の逃亡にはじまる「ある女の生涯」という小説が、ふと、汗まみれの正三の頭には浮ぶのであった。……暫くすると、清二の一家がやって来る。嫂は赤ん坊を背負い、女中は何か荷を抱えている。康子は小さな甥の手をひいて、とつと先頭にいる。（彼女はひとりで逃げていると、警防団につかまりひどく叱しかられたことがあるので、それ以来この甥を借りるようになった）清二と中学生の甥は並んで後からやって来る。それから、その辺の家のラジオに耳を傾けながら、情勢次第によつては更に川上さかのぼに溯つてゆくのだ。長い堤をずんずん行くと、人家も疏まばらになり、田の面や山麓さんろくが朧おぼろに見えて来る。すると、蛙かえるの啼なき声こゑが今あたり一めんにきこえて来る。ひっそりとした夜陰のなかを逃げのびて

ゆく人影はやはり絶えない。いつのまにか夜が明けて、おびた
しいガスが帰路一めん^{たちこ}に立罩^{たちこ}めていることもあった。

時には正三は単独で逃亡することもあった。彼は一カ月前から
在郷軍人の訓練に時折、引ぱり出されていたが、はじめ頃二十人
あまり集合していた同類も、次第に数を減じ、今では四五名にす
ぎなかつた。「いずれ八月には大召集がかかる」と分会長はいつ
た。はるか宇品の方の空では探照灯が揺れ動いている夕闇の校庭
に立たされて、予備少尉の話をきかされている時、正三は気もそ
ぞろであつた。訓練が了えて、家へ戻ったかとおもうと、サイレ
ンが鳴りだすのだつた。だが、つづいて空襲警報が鳴りだす頃
には、正三はぴちんと身支度を了えている。あわただしい訓練のつ

づきのように、彼は闇の往来へ飛出すのだ。それから、かつかと
 鳴る靴音をききながら、彼は帰宅を急いでいる者のような風を粧^{よそお}
 う。橋の関所を無事に通越すと、やがて饒津裏の堤へ来る。ここ
 ではじめて、正三は立留り、叢に腰を下ろすのであった。すぐ川
 下の方には鉄橋があり、水の退^ひいた川には白い砂洲^{さす}が朧に浮上つ
 ている。それは少年の頃からよく散歩して見憶^{みおぼ}えている景色だが、
 正三には、頭上にかぶさる星空が、ふと野戦のありさまを想像さ
 すのだった。『戦争と平和』に出て来る、ある人物の眼に映じる
 美しい大自然のながめ、静まりかえった心境、——そういったも
 のが、この己の死^{しにぎわ}際にも、はたして訪れて来るだろうか。する
 と、ふと正三の蹲^{こずえ}っている叢のすぐ上の杉の梢^{こずえ}の方で、何か微妙

な啼声がした。おや、ほととぎすだな、そうおもいながら正三は
何となく不思議な氣持がした。この戦争が本土決戦に移り、もし
も広島が最後の牙城がじょうとなるとしたら、その時、己は決然と命を
捨てて戦うことができるであろうか。……だが、この街が最後の
楯たてになるなぞ、なんとという狂氣以上の妄想もうそうだろう。仮りにこれ
を叙事詩にするとしたら、最も矮小わいしょうで陰慘かぎりないものにな
るに相違ない。……だが、正三はやはり頭上に被かぶさる見えない
ものの羽拳はばたきを、すぐ身近にきくようなおもいがするのであつた。
警報が解除になり、清二の家までみんな引返しても、正三はこ
の玄関で暫くラジオをきいていることがあつた。どうかすると、
また逃げださなければならぬので、甥も姪もまだ靴のままにいる。

だが、大人達がラジオに氣をとられているうち、さきほどまで
 のしていた甥が、いつのまにか玄関の石の上に手足を投出し、大^お
 鼾^{おいびき}で睡^{ねむ}っていることがあつた。この起伏常なき生活に馴れて
 しまったらしい子供は、まるで兵士のような鼾をかいている。

(この姿を正三は何気なく眺めたのであつたが、それがやがて、
 兵士のような死に方をするとはおもえなかつた。まだ一年生の甥
 は集団疎開へも参加出来ず、時たま国民学校へ通つていた。八月
 六日も恰^{ちやうど}度、学校へ行く日で、その朝、西練兵場の近くで、こ
 の子供はあえなき最後を遂^とげたのだつた)

……暫く待つていても別状ないことがわかった、康子がさきに
 歸つて行き、つづいて正三も清二の門口を出て行く。だが、本家

に戻つて来ると、二枚重ねて着ている服は汗でビツシヨリしているし、シャツも靴下も一刻も早く脱捨ててしまいたい。風呂場で水を浴び、台所の椅子に腰を下ろすと、はじめて正三は人心地ひとごころにかえるようであつた。——今夜の巻も終つた。だが、明晩あすは。

——その明晩も、かならず土佐沖海面から始る。すると、ゲートルだ、雑囊だ、靴だ、すべての用意が闇のなかから飛びついて来るし、逃亡の路は正確に横わつていた。……（このことを後になつて回想すると、正三はその頃比較的健康でもあつたが、よくもあんなに敏びんしょう捷に振舞えたものだと思えるのであつた。人は生涯に於おいてかならず意外な時期を持つものであらうか）

森製作所の工場疎開はのろのろと行われていた。ミシンの取はずしは出来ていても、馬車の割当が廻つて来るのが容易でなかった。馬車がやって来た朝は、みんな運搬に急がしく、順一はとくに活気づいた。ある時、座敷に敷かれていた畳がそっくり、この馬車で運ばれて行つた。畳の剥がれた座敷は、坐板だけで広々とし、ソファが一脚ぽつんと置かれていた。こうなると、いよいよこの家も最後が近いような気がしたが、正三は縁側に佇んで、よく庭の隅の白い花を眺めた。それは梅雨頃から咲きはじめて、一つが朽ちかかる頃には一つが咲き、今も六瓣の、ひっそりした姿を湛えているのだった。次兄にその名称を訊くと、梔子だといった。そういえば子供の頃から見なれた花だが、ひっそりとした

姿が今はたまらなく懐なつかしかった。……

「コレマデナンド クウシユウケイホウニアツタカシレナイ イ
 マモ カイガンノハウガ アカアカトモエテイル ケイホウガデ
 ルタビニ オレハゲンコウヲカカエテ ゴウニモグリコムコノゴ
 ロ オレハ コウトウスウガクノケンキュウヲシテイルノダ ス
 ウガクハウツクシイ ニホンノゲイジユツカハ コレガワカラヌ
 カラダメサ」こんな風な手紙が東京の友人から久し振りに正三の
 手許てもとに届いた。岩手県の方にいる友からはこの頃、便りたよがなかつ
 た。釜石かまいしが艦砲射撃に遇あい、あの辺ももう安全ではなさそうであつた。

ある朝、正三が事務室にいと、近所の会社に勤めている大谷

がやって来た。彼は高子の身内の一人で、順一たちの紛争ごたごたの頃から、よくここへ立寄るので、正三にももう珍しい顔ではなかった。細い脛すねに黒いゲートルを捲まき、ひよろひよろの胴と細長い面は、何か危かしい印象をあたえるのだが、それを支えようとするささき魄きはくも備わっていた。その大谷は順一のテーブルの前につかつかと近よると、

「どうです、広島は。昨夜もまさにやって来るかと思うと、宇部の方そへ外れてしまった。敵もよく知っているよ、宇部には重要工場がありますからな。それに較くらべると、どうも広島なんか兵隊がいるだけで、工業的見地から云わすと殆ど問題ではないからね。きつと大丈夫ここは助かると僕はこの頃思いましたよ」と、大そ

う上機嫌じようきげんで弁じるのであった。（この大谷は八月六日の朝、出勤の途上ついで遂ゆくえに行方不明になったのである）

……だが、広島が助かるかもしれないと思いだした人間は、この大谷ひとりではなかった。一時はあれほど殷賑いんしんをきわめた夜の逃亡も、次第に人足が減じて来たのである。そこへもつて来て、小型機の来襲が数回あったが、白昼、広島上空をよこぎるその大群は、何らこの街に投弾することがなかったばかりか、たまたま西練兵場の高射砲は中型一機を射落したのであった。「広島は防げるでしょうね」と電車のなかの一市民が将校むかに対つて話しかけると、将校は黙々と肯くうなずのであった。……「あ、面白かった。あんな空中戦たら滅多に見られないのに」と康子は正三に云った。

正三は畳のない座敷で、ジイドの『一粒の麦もし死なずば』を読み耽^ふけつていたのであった。アフリカの灼^{しやく}熱^{ねつ}のなかに展開される、青春と自我の、妖^{あや}しげな図が、いつまでも彼の頭にこびりついていた。

清二はこの街全体が助かるとも考えなかったが、川端に臨んだ自分の家は焼けないで欲しいといつも祈っていた。三次町^{みよし}に疎開した二人の子供が無事でこの家に戻って来て、みんなでまた河遊びができる日を夢みるのであった。だが、そういう日^{いつ}が何時^{いつ}やってくるのか、つきつめて考えれば茫^{ぼう}としてわからないのだった。「小さい子供だけでも、どこかへ疎開させたら……」康子は夜毎^{よごと}

の逃亡以来、頻りに氣を揉むようになっていた。「早く何とかして下さい」と妻の光子もその頃になると疎開を口にするのであったが、「おまえ行つてきめて来い」と、清二は頗る不機嫌であった。女房、子供を疎開させて、この自分は——順一のように何もかもうまく行くではなし——この家でどうして暮してゆけるのか、まるで見当がつかなかった。何処か田舎へ家を借りて家財だけでも運んでおきたい、そんな相談なら前から妻としていた。だが、田舎の何処にそんな家がみつかるのか、清二にはまるであてがなかった。この頃になると、清二は長兄の行動をかれこれ、あてこすらないかわりに、じつと怨めしげに、ひとり考えこむのであった。

順一もしかして清二の一家を見捨ててはおけなくなつた。結局、

順一の肝煎きもいりで、田舎へ一軒、家を借りることが出来た。が、荷

を運ぶ馬車はすぐには傭やとえなかつた。田舎へ家が見つかつたとな

ると、清二は吻ほっとして、荷造に忙殺されていた。すると、三次の

方の集団疎開地の先生から、父兄の面会日を通知して来た。三次

の方へ訪ねて行くとなれば、冬物一切を持って行つてやりたいし、

疎開の荷造やら、学童へ持つて行つてやる品の準備で、家のうち

はまたごつたかえした。それに清二は妙な癖があつて、学童へ持

つて行つてやる品々には、きちんと毛筆で名前を記入しておいて

やらぬと気が済まないのだつた。

あれをかたづけたり、これをとりちらかしたりした挙句、夕方

になると清二はふいと気をかえて、釣竿つりざおを持って、すぐ前の川原に出た。この頃あまり釣れないのであるが、糸を垂たれていると、一番気が落着くようであつた。……ふと、トットトットという川のどよめきに清二はびっくりしたように眼をみひらいた。何か川をみつめながら、さきほどから夢をみていたような氣持がする。それも昔読んだ旧約聖書の天変地異の光景をうつらうつらたどつていたようである。すると、崖がけの上の家の方から、「お父さん、お父さん」と大声で光子の呼ぶ姿が見えた。清二が釣竿をかかえて石段を昇つて行くと、妻はだしぬけに、「疎開よ」と云つた。「それがどうした」と清二は何のことかわからないので問いかえした。

「さつき大川がやって来て、そう云ったのですよ、三日以内に立退かねばすぐにこの家とり壊されてしまいます」

「ふーん」と清二は呻いたが、「それで、おまえは承諾したのか」

「だからそう云っているのじやありませんか。何とかしなきゃ大変ですよ。この前、大川に逢った時にはお宅はこの計画の区域に這入りませんと、ちゃんと図面みせながら説明してくれた癖に、こんどは藪から棒に、二〇メートルごとの規定ですと来るのです」

「満洲ゴロに一杯喰わされたか」

「口惜しいではありませんか。何とかしなきゃ大変ですよ」と、光子は苛々しだす。

「おまえ行ってきめてこい」そう清二は嘯いたが、ぐずぐずして

いる場合でもなかった。「本家へ行こう」と、二人はそれから間もなく順一の家を訪れた。しかし、順一はその晩も既に五日市町の方へ出かけたあとであつた。市外電話で順一を呼出そうとする、どうしたものか、その夜は一向、電話が通じない。光子は康子をとらえて、また大川のやり口をだらだらと罵りだす。^{のし}それをきいていると、清二は三日後にとり壊される家の姿が胸につまり、今はもう絶体絶命の気持だつた。

「どうか神様、三日以内にこの広島が大空襲をうけますように」
若い頃クリスチャンであつた清二は、ふと口をひらくとこんな祈をささげたのであつた。

その翌朝、清二の妻は事務室に順一を訪れて、疎開のことをだ

らだらと訴え、建物疎開のことは市会議員の田崎が本家本元らしいのだから、田崎の方へ何とか頼んでもらいたいというのであった。

フン、フンと順一は聴いていたが、やがて、五日市へ電話をかけると、高子にすぐ帰ってこいと命じた。それから、清二を顧みて、「何て有様だ。お宅は建物疎開ですといわれて、ハイそうですか、と、なすがままにされているのか。空襲で焼かれた分なら、保険がもらえるが、疎開でとりはらわれた家は、保険金だつてつかないじゃないか」と、苦情云うのであった。

そのうち暫くすると、高子がやって来た。高子はことのなりゆきを一とおり聴いてから、「じゃあ、ちよつと田崎さんのところ

へ行つて来ましよう」と、気軽に出發して行つた。一時間もたたぬうちに、高子は晴れ晴れした顔で戻つて来た。

「あの辺の建物疎開はあれで打切ることになると、田崎さんは約束してくれました」

こうして、清二の家の難題もすらすら解決した。と、その時、

ちようど
恰度、警戒警報が解除になつた。

「さあ、また警報が出るとうるさいから今のうちに帰りましよう」と高子は急いで外に出て行くのであつた。

暫くすると、土蔵脇わきの鶏小屋で、二羽の雛ひながてんでに時を告げだした。その調子はまだ整っていないので、時に順一たちを興きがらせるのであつたが、今は誰も鶏の啼声に耳を傾けているものも

なかった。暑い陽光が、ひざし百日紅さるすべりの上の、静かな空に漲みなぎっていた。
 ……原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあ
 った。

（昭和二十四年一月号『近代文学』）

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

1999（平成11）年5月25日38刷

※「嵐《あらし》が揉《も》みくちやにされて」を、「嵐に」としている異本がある。

入力：tatsuki

校正：皆森もなみ

2002年10月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

壊滅の序曲

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>